OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ライプニッツの空間概念
Author(s)	松田, 孝之
Citation	メタフュシカ. 1999, 30, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66615
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ライプニッツの空間概念

松田孝之

はじめに

ライプニッツの哲学の特色の一つとして、普遍学の構想が挙げられるだろう。この普遍学の構想は、ライプニッツが単純な概念を有する記号を論理的に操作するという普遍的記号法にその可能性を求めたことからもわかるように、あらゆる知的領域をカバーするような共通の方法論の構想であると言い換えることができるだろう。それはデカルトの「普遍数学（mathesis universalis）」の構想を推し進めるものであると言えるだろう。さらに、あらゆる知的領域に共通の方法論があるという考えの底には、あらゆる学問に共通点があるという思想、言い換えれば、（諸学の基礎に何を置くかは別として、）デカルトが「哲学の樹」という比喩を用いて説明しようとした発想、すなわちあらゆる学問は密接に絡み合っており、一見無関係に見えるものにも論理的な関係があり、諸学の基礎となる学問を厳密な学とすることによって、体系的にその他の学問も厳密なものとする基礎付けがなされるとする発想が流れていると考えられる。このような発想から、十七世紀の哲学は、とりわけライプニッツの哲学は体系化の道を歩んだと言える。このような哲学の体系化が新たな課題を課すことになる。すなわち、体系化という限りは諸学相互の関係を系統立てて整理せねばならない。そこで、体系化の目標のために、諸学の形而上学による基礎付けという課題が生じるのである。そのような基礎付けの試みのうちでも重要なものの一つに自然学のそれが挙げられる。自然学の中でも特に数量的に幾何学的手法によって研究が進められ、他の学問領域よりも論理的に厳密に論じられつつあった力学法則をまずいかにして形而上学的に基礎づけるかが、デカルトに限らずライプニッツにおいても一つの大きな課題となるのである。本稿においては、ライプニッツがそのような力学法則に代表され

る自然学を基礎づける上で、その空間概念が持つ意義、及び問題点をデカルトの空間概念などを参照しつつ明らかにし、ライプニッツの形而上学と自然学のつながりの一端を提示し、さらに、ライプニッツの空間概念が哲学史的にどのような意義を持つものかも合わせて評価することにしたい。

一　ライプニッツによるデカルト的空間概念の批判

ライプニッツの空間概念をより明らかなものとするために、まずライプニッツがデカルト的空間概念をどのように批判しているかを見ていくことにしたい。そのためにもまず、デカルトの空間概念を概観しておきたい。デカルトは『哲学原理』において、以下のように空間を定義づける。「物質の本性あるいは一般的に考えられる物体の本性が（中略）長さ、幅、高さに延長されたものであるという点にのみ存する」[1]とし、物体の本性が延長にのみ存することを指摘した上で、さらに、「空間を構成する長さ、幅、高さへの延長は、物体を構成するそれと明らかに同一のものである」[2]のだから、それゆえに、「空間あるいは内的場所と、そのうちに置かれた物体的実体とは本質において異なるものではなく、単に通常の我々における理解の仕方において異なるにすぎない」[3]と。したがって、デカルトにとって空間とは物体的実体以外のものではないのである。このように概観すると、デカルトの空間概念は「物体＝延長＝空間」と定式化される。[4]

では、このような空間概念に対してライプニッツはどのような批判をするのだろうか。[5]ここでは、一六七〇年代後半に交わされたマールブランシュとの往復書簡[6]（I 321-361）において、「物質の本質は延長にのみ存する」（I 321）というマールブランシュの考えに対して、ライプニッツが行った批判を通して、少し考えてみたい。[7]ライプニッツはマールブランシュの論証過程を以下のように再構成する。「一）空虚（vuide）は現実に異なる部分をもつ。二）現実に異なる二つの事物は分離可能である。三）分離可能な延長した二つの事物は動くことが可能である。四）動きうる部分をもつすべてのものは物質である。五）それゆえ、先に提示されたところの空虚は物質である」（I 321）と。以上のような推論過程のうちライプニッツは二番目と三番目の定理に対して疑問を差し挟む。

まず、第三の定理については、運動なしに空間（espace, espace vuide）が分割可能であるということ、例えば、空間の部分の一方を破壊することによって他方と分割する方法などを示し、このことから、空間の可動性が空間の可分性の必然的な帰結ではないことを証明し、第三の定理を否定する[8]（I 322）。

だが、重要なのは、第二の定理についての批判である。ライプニッツは第二の定理を以下のように再構成する。「一）現実

に異なる二つの事物は他方なしに一方を完全に理解しうる。二）他方なしに一方を完全に理解しうる二つの事物は他方なしに一方が存在し得るか、あるいは分割可能である。三）それ故、現実に異なる二つの事物は分割可能である」（I 322）と。以上の推論過程に対して、ライプニッツは「事物を完全に理解するということが、事物を構成するのに十分なすべての必要条件を理解することであるなら、私は次の定理を認める。すなわち、ある事物を構成するのに十分なすべての必要条件が、他の事物を構成するのに十分なすべての必要条件を理解することなしに、理解され得るとき、一方は他方なしに存在しうる」（I 322-323）として、再構成された推論の第二項には同意するが、第一項、すなわち「二つの事物が現実に異なっているとき、一方のすべての必要条件は他方のすべての必要条件を理解することなしに理解しうる」に対して疑問を投げかける。

以上のライプニッツの疑問へのマールブランシュの返答に対してさらにライプニッツは批判を加える。まず、第二の定理に対するライプニッツの批判に対するマールブランシュの返答の要旨をライプニッツの記述を通して確認しよう。「あなたはあなたの返答において絶対的存在と相対的存在の間を区別しています。そしてあなたはこう言います。絶対的存在は必要条件を持たない。ところで問題となっている諸事物、すなわち二つの空間の部分は絶対的存在である。それ故、それらは必要条件を持たないのだから、一方は他方を完全に理解しなくとも完全に理解しうるということは真である」（I 325）と。このような考えに対し、ライプニッツは次のように批判する。「私の考えでは、作られうるものはすべてその外に必要条件を、すなわちそれを作るのに寄与したものを有す。ところで、空間の諸部分はそれを断ち切る物体の運動によって作られる。それ故、それらは必要条件を持つ」（I 325）と。しかしながら、マールブランシュは正反対の証明を行おうとする。「空間の諸部分は存在の様態あるいは相対的存在ではなく、絶対的存在である。絶対的存在は単純な観念を持つ。その観念が単純である事物は必要条件を持たない。それ故空間の諸部分は必要条件を持たない」（I 325）と。問題はどこにあるのか。ライプニッツは、マールブランシュの絶対的存在についての説明に従えば、それは神や神の完全性、属性についてのみ言われるべきであって、空間の部分が絶対的存在であるという考えには同意できないという（I 325）。

次に、第三の定理、すなわち「可動性は可分性の帰結である」に対するライプニッツの批判に対するマールブランシュの返答の要旨をライプニッツの記述を通して確認しよう。「あなた（マールブランシュ）の証明は次のようなものです。二つの延長した事物を分けるものは二つの事物の間にある。二つの事物の間にあるものはその大きさを増すと考えることができる。大

きさを増しつつある二つの事物の間にあるものはそれらの間の距離を広げる。二つの事物の間の距離を広げるものはそれらを動かしている。それ故、二つの延長した事物を分けるものはそれらを動かす」（I 326）と。ライプニッツは以上の証明の最初の「二つの延長した事物を分けるものは二つの事物の間にある」という項を否定する。なぜなら、最初の批判で述べたとおり、空間の部分の一方を破壊することによって他方と分割するなどして位置の変化としての運動なしに空間が分割可能であるから。

以上のような議論からどのようなことがわかるだろうか。ライプニッツとマールブランシュの議論の食い違いの原因は延長の概念の違いに基づく。すなわち、マールブランシュは「空間の諸部分は絶対的存在である」といっていることからもわかるとおり、空間、延長を実体と考えている。それに対してライプニッツは延長を実体を構成し得ないと考えている。以上の記述からもある程度分かるように、同一の文脈において「空間（espace）」、「延長（étendue）」という語が同じような使われ方をしているところから見ても、一六七〇年代の後半においては未だ空間と延長は区別されず、ライプニッツの独自の空間概念は露になっていない。しかし、少なくとも延長概念の批判を通して、先に挙げた「物体＝延長＝空間」の図式の「物体＝延長」の批判は成立していると言えるだろう。ライプニッツは、『形而上学叙説』において、次のように述べている。「実体の本性について省察する者はあらゆる物体の本性が延長すなわち大きさ、形や運動にのみ存するのではなく、魂と関係があり、一般に実体的形相と呼ばれる何かを必然的にそのうちに認めねばならないのが分かるだろう。（中略）大きさ、かたち、運動といった概念は我々が考えているほど判明な概念ではなく、想像的で、我々の表象に関係のある何かを含んでいるということを証明することさえできる。（中略）そういうわけで、これらの種類の性質〔色、熱などの我々の外部の事物の本性に真に属しているかどうか疑いうる性質はなおさらのこと大きさ、かたち運動などの性質〕はいかなる実体も構成し得ない」（IV 436, D. M. §XII）と。また、アルノー宛の書簡においては、このように述べる。「私は次のように考える。実体のうちに延長、形や運動によっては説明されない性質があり、そのうえ、無限に続けて現実に分割できるのだから、物体のうちには厳密かつ確固としたいかなる形も存在しないのである。そして、運動が延長の変様や隣接したものの変化でしかない限り、それは何か想像的なものを含んでおり、その結果、もし運動の原因であり、物体的実体のうちに存する力に訴えないならば、変化するもののうちどれが変化しているのか決定できなくなるだろう」（II 97-98）と。ここまでの議論を要約すれば、デカルト的空間概念とライプニッツの空間概念との違いは、前者が実体であるのに対し、

後者が実体ではないという点に存すると言えるだろう。それでは、実体ではなくて何なのか、ライプニッツ独自の空間概念は具体的にどのように形成されていったのであろうか。

二　ライプニッツの空間概念

マールブランシュ宛の書簡などにあっては批判に終始し、はっきりと提示されなかった空間概念が形を取り始めるのが、アルノー宛の書簡においてであることは大きく的をはずれることがないであろう。一六八七年に書かれたアルノー宛の書簡には、「我々が時間や空間について持つあらゆる概念はこの［実体の間の、その現象の間の］合致に基づく」（II 115）と、さらに「物塊と捉えられた物質はそれ自身空間や時間と同様によく根拠づけられた純粋な現象あるいは現れにすぎない」（II 118-119）とも述べられている。このように空間をある種の現象と捉える見解は一六九〇年前後にすでに現れている。しかしながら以上のような記述からも分かるように、その詳細はまだ不明である。

さて、このような現象としての空間概念が形成される過程をよく露にしているのが、デ・フォルダー宛の書簡であると言える。以下、この書簡における記述を追って形成過程を見ていきたい。一六九九年三月二四日付の書簡において、「延長（extensio）だけでは実体を構成することはできない。というのは、延長の概念は不完足なものだからである。また、延長がそれだけで理解されるとも思わない。そうではなく、延長はさらに分解可能な相対的な概念であると思う。確かに延長は多数性（pluralitas）、連続性（continuitas）、共実在（coexistentia）すなわち同一の時に部分が実在することに分解される。多数性は数にも属し、連続性は時間と運動にも属し、対して共実在は延長体（extensum）にのみ与る」（II 169 -170）と述べられている。以上の記述では明らかではないが、さらに続けてライプニッツは「このことからさらに常に連続するか拡散する（diffundo）何かが仮定されることは明白である。（中略）というのも連続性は（確かに延長は同時的連続性（simultanea continuitas）以外のものではないのだから）それだけでは多性（multitudo）や数と同様に、実体を完成しない。そのためには数えられ、反復（repetatur）され、連続するものがなければならない」（II 170）と述べる。このような記述から少なくとも延長とは数えられたり連続したりするものそのものではなく、そのようなものの間の関係であるということが分かる。

では、このような延長概念がどのようにして深化され、まさに延長と空間とに分化されていくのであろうか。まず、数えられたり連続したりするものとは何か。それについては同じく一六九九年に書かれた日付のない書簡に次のように述べられる。

「正確に言うと、延長は数や時間のように様態的なものでしかなく、事物ではない。というのは、延長は共に実在する諸事物の連続的な可能的多数性（pluralitas possibles continuae coexistentium rerum）を抽象的に示すものだからである。さらに物質はまさにその多数の事物そのものであり、よって、複数のエンテレケイアを含むものの集まり（aggregatum）である」（II 195）と。つまり、先に述べられた連続するものとは共に実在する諸事物のことであり、それはエンテレケイアを含むものの集まりであり、そのような集まりの現れは「確かに［少なくとも基礎づけられ、規則正しい］現象に他ならない」（II 251）のである。ここに至って、延長を成立させる主体が実体の集まりとしての現象であり、その相互の関係が延長であるということが提示される。

それでは、延長と空間との区別はどのようにして為されるのだろうか。一六九九年六月二三日付の書簡には次のように述べられている。「延長は属性であり、延長体すなわち物質は一つの実体ではなく、複数の実体である。のみならず、持続（duratio）、時間（tempus）、持続するもの（res durans）が、それぞれ類比して、延長（extensio）、場所（locus）、置かれたもの（res locata）に対応する」（II 183）と。ここにおいて、延長とは明確に区別された概念として場所という概念が提示されている。この場所という概念が延長と空間との区別に大きく寄与している。

以上の記述においてはあまり明らかにされていない場所と延長の違いについてはひとまず留保しておいて、まず、場所と空間という概念との違いがいかなるものかを明らかにしよう。一七〇三年六月二〇日付の書簡において、ライプニッツは次のように述べている。「以前私は延長は可能的な共実在の秩序（ordo coexistentiarum possibilium）であり、時間は存在しないものの可能性の秩序[9]（ordo possibilitatum inconsistentium）であると述べた。ここから、もしそうならば、どうして時間は物体的な事物と同様にすべての精神的事物にも関わるのに延長は物体的な事物にしか関わらないのか、とあなたは疑問を呈する。私は次のように答える。どちらの場合も銘々の関係は同じである。すなわち、物質的なものの変化と同様に精神的なものの変化には、継起的なものの秩序つまり時間における事物自身のいわば座席（sedes）が合致し、物質的なもの及び精神的なものの変化には、共実在の秩序つまり空間における事物自身の場所（locus）が合致する。というのは、モナドは延長していないにも関わらず、延長のうちにある種の位置（situs）を備えている。すなわち、それらのモナドが、自らに現前している機械[10]（machina）を通して、他のものに対して秩序づけられたある種の共実在的関係を持つのである。どんな有限実体も物体から完全に離れて存在することはなく、さもなければ、宇宙の他の共

に実在する事物に対する位置あるいは秩序を欠くことになると私は思う」[11]（II 253）と。以上の記述において、細かな点を考慮に入れずに、文字どおりに文意をくみ取ると、少なくとも空間のうちに場所がある、空間の部分として場所が考えられているということが分かる。しかし、より理解を容易にするために、一七一六年八月一八日発送のクラーク宛の書簡の記述を参照することにしたい。そこには次のように述べられている。「人間がどのようにして空間の概念を形成するようになったかは次の通りである。複数の事物が同時に存在するのを考察し、ある共実在の秩序（ordre de coexistence）がそこにあるのを見いだす。そして、その秩序に従うことによって、ある事物とその他の事物との関係が多かれ少なかれ単純なものとなる。その秩序とはそれらの事物の位置（situation）あるいは距離（distance）である。これらの共実在の一つが、他の多くの共実在が相互の関係を変えることなしに、他の共実在との関係を変える。そして、新たにやってきた共実在が最初の共実在が他の共実在に対して持っていたのと同じ関係を獲得するということが起こるとき、新たにやってきた共実在は最初のものの場所（*place*）に来たと言われ、この変化を、運動と呼び、この運動は変化の直接の原因が属する共実在に存する。そして、複数の事物があるいはすべての事物が、ある既知の規則に従って方向と速さを変えるとき、我々は常に、各々がそれぞれの事物に対して獲得する位置の関係を決定することができ、またもしまた別の諸事物が変化しなかったり、他の仕方で変化した場合に、その別の諸事物それぞれが持つ位置の関係や、またその諸事物の各々がまた別の諸事物のそれぞれに対してもつ位置の関係さえ確定することができる。そして、これらの共実在の間にそれらの間で相互に変化しない充分な数の何かがあると仮定あるいは想像するならば、ある共実在が、以前他の共実在がこれらの定着した共実在に対してもっていたのと同じ関係を、これらの定着した共実在に対して持つ場合、この共実在が、上記の他の共実在がかつてとっていた同じ場所をとったと言われるだろう。そして、これらのすべての場所を含むものが空間と呼ばれる」[12]（VII 400）と。このような記述を通して、我々はより明晰な空間についての観念を得ることができる。すなわち、場所とは共実在相互の位置関係であり、空間とはその位置関係の総体であり、図式化すれば、場所と空間との関係は部分と全体の関係であると言える。

以上のように、場所と空間の違いを明らかにした上で、先に留保していた延長と場所の違いについて考察を加えることにしよう。それによって、かつては混同されていた延長と空間とを明確に区別し、ライプニッツの空間概念の内実を明らかにすることができるだろう。一七〇四年六月三〇日付のデ・フォルダー宛の書簡を参照しよう。ライプニッツは次のように述べている。「明らかに空間は可能なものの同時に存在することの秩序

(ordo existendi simul possibilium) 以外のものではなく、時間は可能なものの継起的に存在することの秩序（ordo existendi succesive possibilium）である。そして、物理的物体が空間に対して持つ関係は、事物の状態あるいは系列が時間に対して持つ関係と同様である。そして、物体ならびに事物の系列が空間と時間に運動すなわち能動と受動、そしてその原理を付加するのである。（中略）延長は延長体の抽象物であり、さらに数や多性が実体と考えられないように、実体ではない。そしてそれが表出しているのは、（持続のように）継起的なものではなく、ある本性の同時的な拡散（diffusio）あるいは反復（repetitio）以外のものではない。あるいは同じことに帰するが、同じ本性を持ち、相互に何らかの秩序を持って同時に存在している事物の多数性である」（II 269）と。以上の記述から延長も空間もほぼ同様の定義が為されていることが分かる。先に延長は「可能的な共実在の秩序」（II 253）であると言われ、ここでは空間は「可能なものの同時に存在することの秩序」（II 269）であると言われている。結局のところ延長と空間とは同一のものなのだろうか。ある意味では同一と言えるが、また別の意味ではそうではないと言える。そのヒントとなるのが、先の引用における、延長が表出するものはある本性の同時的な拡散であるという記述である。この拡散とは何か。それは引用箇所における換言からも想像できるように、反復であり、多数性であり、まさに共に存在するということである。では一体空間と延長との関係はどのように整理すべきなのだろうか。

ライプニッツは動物の魂について論じた無題の断片において次のように述べている。「それだけで考えられた質料、すなわち裸の質料（Materia nuda）は不可入性（Antitypia）と延長（Extensio）によって構成される。不可入性とは、それによって質料が空間に存在するようになる属性のことである。延長とは、空間の中の連続であり、場所の中での連続的な拡散（diffusio）のことである。さらに、それゆえ、不可入性が場所の中で連続的に拡散され、他の何ものも措かれていないとき、それだけの質料、すなわち裸の質料が生じる」（VII 328）と。すなわち、延長とは何かが連続的に拡散される事態をいい、その拡散するものが不可入性であるとき、質料が成立するということになる。しかし、このような記述だけでは、何らかの絶対的な空間において、拡散が起こるように思われる。ところがこのような理解は当然ライプニッツの意図とは大きく異なるものとなる。

そこで、さらに、一七一三年に書かれた「アリストとテオドールの最初の対話に続く、フィラレートとアリストの対話（Entretien de Philarete et d'Ariste, suite du premier entretien d'Ariste et de Theodore）」（VI 579 - 594）の記述を参照したい。そこには次のように記されている。「延長は抽象物以外のものではなく、何か延長するものを必要とする。それは主体を必要としており、

持続のようにこの主体に相対的なものである。それはこの主体のうちに先行する何かを仮定さえしている。それは拡がり、主体と共に散らばり、連続する何らかの性質、属性、主体の本性を仮定している。延長はこの性質あるいは本性の拡散（diffusion）なのである。（中略）物体一般には不可入性（antitypie）あるいは物質性（materialité）の延長あるいは拡散がある。したがってあなた方は同時に物体のうちには延長に先行するものがあると分かる。そして、いわば、延長と空間の関係は持続と時間の関係のようなものなのである。持続と延長は事物の属性であるが、時間と空間は事物の外にあるものと見なされ、それらを計量するのに役立つ」（VI 584）と。以上の記述において、やはり、延長には延長するものである何かが存在せねばならず、その拡散とは先に確認したようにあくまで反復であり、多数性であり、まさに共に存在するということなのである。さらに、延長が、ある物体、言い換えればある事物に対応するものであるのに対して、空間は事物の外部に対応するものであると言われている。このように延長と空間はその対応するものの違いとして区別されているのだが、その概念に大きな違いはない。同じく「フィラレートとアリストの対話」に次のように述べられている。「私は常に延長あるいは拡張と、位置あるいは場所性（localité）のことである（関係的な概念である）延長あるいは拡散が関わる属性とを区別したいのです。だから、場所の拡散が、第一受容者（πρωτον δεκτικον）すなわち延長の第一主体である空間を、それによって空間のうちにある他の事物にも適合している空間を形成するのである。だから、延長は、それが空間の属性であるときには、物体の延長が不可入性や物質性の拡散であるように、位置や場所性の拡散あるいは連続なのである」（VI 585）と。すなわち、物体の延長は不可入性や物質性の拡散であり、空間の延長は位置や場所性の拡散であるといわれる。要するに、拡散すなわち共に存在するということ、というあり方に違いはなく、その共に存在するものの違いに延長（物体の延長）と空間（空間の延長）は存するのである。

以上のような考察を通して、次のように図式化することができるだろう。空間は場所が共実在するという秩序であり、場所は共実在相互の位置関係であり、個々の共実在とは諸事物であり、すなわち物体である。そして、その延長とは物体のうちの何らかの性質の共実在の秩序なのである。このように図式化すると、延長とは全く観念的なものであり、それを属性とする物体もまた観念的な現象であるということになり、その現象相互の位置関係の論理的な共存関係こそが空間であり、まさにライプニッツの空間概念は現象における論理的関係として特徴づけられ、その意味では全く実体のような絶対的存在などではなく、観念的なものであり相対的存在だと言えるのである。

むすびに

さて、本稿において、我々は、ライプニッツの空間概念を現象としての物体の共実在の秩序であると結論づけたわけだが、このような空間概念にどのような意義があるのだろうか。

ライプニッツの空間概念は全く現象に属することであり、よって、「現象つまり結果的集まり（aggregatum resultantum）においてはすべてが直ちに機械的に説明され、物塊は相互に動かし合うと考えられる。そして、この現象においては、派生的力（vis derivativa）を考察しさえすればよい。そのときには、派生的力がどこから結果するのか、すなわち集まりの現象がモナドの実在性から結果することが一度確定されればよい」（II 250）といわれるように、現象として力学法則を形而上学の属するものとは区別して取り扱うことができる。このような現象と実体の完全な区別によって、形而上学による自然学の基礎付けを幾何学的な機械論的な手法で行うのは非常に困難なこととなる。しかし、このような区別は、ライプニッツが、以下に示すように、形而上学による自然学の基礎付けを機械論的な手法で行うことが不可能だとは言わないが、それよりもむしろ、全く正反対の目的論的な手法によって、基礎付けははるかに容易に為されると考えている点につながると言えるだろう。つまり、別の途が残されているのだから、一方の途を事実上閉ざしてしまってもかまわないと言うことである。このような目的論的手法の重要性は『形而上学叙説』においてすでに提示されている。「事物に秩序を与える至高の知性を導入し、次に現象を説明するためにはその叡智を用いるのではなく、物質の性質しか使わないというのでは不合理なことである」（IV 446, D. M. § XIX）、「自然の諸々の結果は二通りの仕方で証明できる、すなわち動力因の考察によるものと、目的因の考察によるものである」（IV 447, D. M. § XXI）、そしてまた「実際により深遠で、ある点からするとより直接的でア・プリオリである動力因の途は、細かい点に進むと、かえってかなり困難なものとなる。（中略）しかし、目的論の途はより容易であり、もう一つむしろ自然学的な途によると見つけるのに非常に長い時間かかるような重要かつ有益な真理を即座に見抜くのにしばしば役立つものである」（IV 447- 448, D. M. § XXII）と。このようにライプニッツには目的論的考察を重要視する態度が認められる。事実、空間が絶対的存在ではないとするライプニッツの証明にその点が色濃く現れているということができる。

すなわち、一七一六年二月二五日発送のクラーク宛の書簡において、ライプニッツは次のように述べている。「もし空間が絶対的存在であるならば、空間はその充足理由（raison suffisante）があり得ないような何かを生じるだろう、そしてこのことは我々の公理に反する。以上は次のように証明される。

空間は何か絶対的に均質なものである。そして、そこにおかれる事物なしには、空間のある点は空間の他の点といかなる点においても絶対的に異なることがない。しかるに、このことから次のことが帰結する。もし空間が諸物体のお互いの間の秩序であることに加えて、それ自身何らかの事物であるならば、諸物体の相互の位置を保っている神が、なぜ空間のうちに物体をこのように置き、他の仕方で置かないのかということ、すべてが（例えば）東と西の交代によって逆向きに置かれなかったのかということの理由があり得ないこととなる。しかし、もし空間がこの秩序すなわち関係以外の何ものでもなく、物体なしには全くいかなる事物でもなく、可能ないくつかの物体の置き方、すなわち、今あるような置き方と仮定された逆向きの置き方という、これら二つの状態が相互に全く異ならないならば、それらの物体の置き方の違いは空間の実在性という我々の根拠のない仮定それ自身のうちにのみあることになる。しかし、まさに、両者は絶対的に弁別不可能（indiscernable）なのだから、一方は他方と全く同じものなのであり、したがって、一方が他方よりも好まれている理由を求める余地はないのである」（Ⅶ 364）と。以上の記述から分かるように、ライプニッツは、充足理由律に、すなわち神が何の根拠もなしにこの世界を選択したはずがないという、まさに形而上学的、神学的前提に依拠した目的論によって証明を行っている。このように、ライプニッツは機械論によって出口のない迷宮に入り込むよりは目的論によって迷宮の外を廻って出口にたどり着くことを選ぶのである。ここに、形而上学的目的論による諸学の基礎付けの典型を看取することが、また形而上学的目的論に基づく諸学の体系化への意図を感じとることができるだろう。だからといって、機械論的な基礎付けの途が放棄されるわけではないことに注意しなければならない。なぜなら、先に述べたとおり、機械論の途は「実際により深遠で、ある点からするとより直接的でア・プリオリである」（Ⅳ 447-448, D. M. § XXII）のだから。したがって、目的論的基礎付けは機械論的基礎付けを伴うことによって完全なものとなるのであり、この機械論の途がどのようにライプニッツによってつけられているかを今後明らかにする必要があるだろう。

さらに、ライプニッツが空間を実在ではなく秩序であるとし、観念的なものであると見なしたことに大きな意義があるのではないだろうか。ライプニッツは一七〇六年一月一九日付のデ・フォルダー宛の書簡において次のように述べている。「現実的なもののうちにおいては、不連続の量、つまりモナドあるいは単純実体の多性しかない。（中略）ところが、連続的な量は観念的なものであり、可能なものと可能な限りの現実的なものに関わる。（中略）連続的なもの、すなわち可能的なものの知識は、現実的現象に決して侵されないような永遠真理を

含む」（II 282）と。すなわち、共実在の秩序であるところの空間概念は、「時間と空間は可能なものと実在するものに等しく関わる永遠真理の性質をもつ」（IV 140, N. E. II Chap. XIV § 26）と言われるように、また、クラーク宛の書簡において、「もし被造物が存在しなかったならば、空間も時間も神の観念のうちにのみあることだろう」（VII 376 - 377）と言われるように、秩序であるがゆえに、永遠真理に類するものであり、かつ観念的なものであると言える。そして、ライプニッツにとって観念が「何らかの思惟の働き（*cogitandus actus*）にではなく、思惟する能力（*facultas*）に存する」（VII 263）のであるならば、それゆえまさにライプニッツの空間概念は、現象としての物体の認識において、必然的に伴うものであり、そのような意味では、内実はともかくとしてカントの空間という感性形式に類するものということができ、したがってこのように考える限りにおいて、ライプニッツの空間概念は（そして本稿ではほとんど論じなかったが時間概念もまた）カントの感性形式としての空間概念（時間概念）を予告するものとしての、十七世紀哲学において先進的な意義を持つものであると言えるだろう。

注

ゲルハルト版ライプニッツ哲学著作集（*Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz*, hrsg. von C. I. Gerhardt, Olms, 1996）からの引用および参照箇所には、「V 367」の要領で、巻数（ローマ数字）と頁数（アラビア数字）を併記した略号によって、文中にて引用・参照箇所を示す。

さらに、以下の著作からの引用ないし参照箇所には、上の記号に引き続いて、下記の記号を、すなわち、『形而上学叙説』からは、「D. M. § XXX」の要領で、「D. M.」の略号に節の番号（ローマ数字）を、『人間知性新論』からは「N. E. I Chap. I § 1」の要領で、「N. E.」の略号に部（ローマ数字）と章の番号（ローマ数字）・節の番号（アラビア数字）を、「理性に基づく自然と恩寵の原理」からは、「Prin. 14」の要領で、「Prin.」の略号に節の番号（アラビア数字）を、それぞれ併記する。

なお、ゲルハルト版において隔字体で印刷されている箇所は傍点で示す。

（1）*Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery, Vrin, 1996, t. VIII, p. 42.

（2）*Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery, Vrin, 1996, t. VIII, p. 45.

（3）*Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery, Vrin, 1996, t. VIII, p. 45.

（4）以上のような、デカルトの空間概念については、デカルトの運動概念について論じた以下の論稿を参照。米虫正巳「デカルトにおける「力」と「運動」」、『カルテシアーナ』第十四号、一九九七年、八二～八三頁。

（5）デカルトもライプニッツもともに空虚を認めないという点では一致しているが、その根拠はデカルトの場合とライプニッツの場合とでは大きく異なる。デカルトの場合は、先に引用したように、空間の延長と物体の延長が異ならないということは、空間の延長もまた実体であるから、実体のない空虚などは認められない（*Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery, Vrin, 1996, t. VIII, p. 49.）と

するのに対して、ライプニッツの場合は、後に述べるように、いわゆる不弁別者同一の原理と充足理由律をもって否定する（VII 364）。そして、この点こそがデカルトの空間概念の批判の根底に横たわっていると言えるだろう。

（6）マールブランシュとの書簡のやりとり自体は、二度ほどの一〇年前後の空白期間を挟みつつ、一六七〇年代から一七一〇年前後のかなり長期に渡って、行われているが、延長概念をめぐるまとまった論争は一六七〇年代に偏っている。以後は、力学法則や数学、さらには予定調和などの話題に力点が移されている。

（7）マールブランシュの思想とデカルトの思想は厳密には異なるものであり、マールブランシュに対する批判を代表させてデカルト主義に対する批判と見なすのは乱暴であるように思われる。しかし、後の記述には、物質の性質が、それが部分からなり、その部分に対して可動的であるなどという『哲学原理』第二部第二三節での記述（cf. (*Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery, Vrin, 1996, t. VIII, p. 52 - 53.）等との類縁性が認められ、その意味では少なくともマールブランシュの空間・物体・延長をめぐる議論はデカルトの議論をより厳密に再構成したものと言うことができ、したがって、マールブランシュに対する批判はデカルトにも当てはまるものだと言える。

（8）テキストから分かるように、ここでは、"vuide"に対応する語として、"espace"や"espace vuide"という語が用いられている。このような用語法は、デカルトの『哲学原理』第二部第五、一六、一七節などでの用語法（cf. (*Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery, Vrin, 1996, t. VIII, p. 42 - 43, 49 - 50.）を思わせる。この点からも、当時ライプニッツが独自の空間概念をまだ成立させていなかったことが窺える。

（9）本文のように一応訳したが、文脈から佐々木能章の「非共存的なものの諸可能性の秩序」という訳（佐々木能章訳「デ・フォルダー宛書簡（抄）」、『ライプニッツ著作集　第九巻　後期哲学』、工作舎、一九八九年、一〇三頁）が解釈としても妥当なものだろう。

（10）このような記述はしかしながら誤解を生みやすいものである。例えば、アダムスが指摘するように、ハルツ（Hartz, Glenn A.）はこのようなライプニッツの記述を典拠にして、空間のうちに物体やモナドが位置づけられると考えている（Adams, Robert Merrihew, *LEIBNIZ Determinist, Theist, Idealist*, Oxford University Press, 1994, p. 254.）。

また、メイツは、この記述を典拠にしているわけではないが、「ライプニッツの空間・時間には二種類あり、一つはモナドの真の世界にとってのものであり、もう一つは物体の現象的世界にとってのものである」（Mates, Benson, *The Philosophy of Leibniz*, Oxford University Press, 1986, p. 228.）と述べている。ハルツやメイツのようにライプニッツの空間概念を解釈することはライプニッツの意図と大きくはずれてしまうのではないだろうか。確かに物体はモナドの集合体であり、その点でモナドは有機物全体さらに有機物のうちの各モナドに対して何らかの関係を有しており、その意味で物体において位置づけられる（cf. II 252）。しかし、そのような関係ももとを正せば、各モナドのうちの表象に還元される(cf. VI 598 - 599, Prin. 3)のであり、その関係は実在的なものとは言えず、いわゆる実在的な空間のうちに位置づけられるというのとは全く性質を異にしている。このようなモナドの相互関係に対して空間概念を適用するのは、悪戯に混乱を招くだけであろう。さらに物体についても、それが空間のうちに位置づけられると考えるのは、クラーク宛の書簡などで述べられている記述(VII 400)などから明らかに不適当であるといわざるを得ない。やはり、アダムスが述べるとおり、「空間は実在的事物の関係に基づいているけれども単に観念的な何か、精神によって課された秩序」であり、「モナドの表現内容の一部として、空間的関係(spatial relation)をもつモナドの表象についての事実がライプニッツの形而上学の第一のレベルに属するかもしれないという限りにおいての場合を除いて、そのレベルにおいてはいかなる空間的事実（spatial fact）」もなく、「それ自身においてはモナドはいかなる空間的位置（spatial position）もその他の空間的性質（spatial

property）ももたない」(Adams, Robert Merrihew, *LEIBNIZ Determinist, Theist, Idealist*, Oxford University Press, 1994, p. 255.) と考えるのが妥当な解釈であろう。

(11) ここで言われている機械とは、身体のような有機的機械のことである。例えば次のような記述がある。「もしあなたが物塊を複数の実体を含む集まり（aggregatum）であると仮定しても、それにもかかわらず、そのうちに一つの優越的な実体（substantia praeeminenta）つまり生命を与える第一のエンテレケイア（entelechia primaria）を考えることができる。のみならず、エンテレケイアをもった完足した単純実体（substantia simplex completa）すなわちモナドには、有機的身体（corpus organicus）の塊全体に関係のある原始的受動的力（vis passiva primitiva）のみが結びつけられる。そして、諸器官に配置された残りの従属的モナド（monade subordinata）は有機的身体の部分となるのではないが、それにもかかわらず、有機的身体にとって直接必要とされる。そして、それらの従属的モナドは第一のモナド（primaria Monade）と出会い、有機的な物体的実体（substantia corpora organica）すなわち動植物となる。それゆえ、私は次のものを区別する。(一)原始的エンテレケイア、すなわち魂、(二)もちろん第一質料（Materia prima）、すなわち原始的受動的力、(三)この両者を伴った完足的モナド（Monada completa）、(四)物塊すなわち、第二質料（Materia secunda）、あるいはそのうちに無数の従属的モナドが集まっている有機的機械（Machina organica）、(五)動物、すなわち機械のうちの支配的モナド（Monas dominans）がそれを一にするところの物体的実体を」(GII 252)。

(12) このような記述における場所の定義は趣を異にしているとはいえ、デカルトの次のような記述を、すなわち「我々がある事物がこの場所にあると言う時には常に、我々は、それが他のものの間でこの位置を占めているということ以外のことを理解しない」(*Œuvres de Descartes*, éd. Charles Adam et Paul Tannery, Vrin, 1996, t. Ⅷ, p. 48.) を思い出させる。